旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

◇31◇

若松　秀俊

講義録から（中）

歌を間に入れ、優しく授業

「カルシュ先生の授業」といっても、なにぶん七十年以上も前の高校生（九期文乙の宮田正信）が書き留めたものである。当時、ドイツ語は先生四人がかりの授業であった。うち三人の先生については定期的に試験があったが、カルシュの分は別枠で、特に時間を定めて試験を受けた記憶がないという。

毎週が実地訓練の連続で、終始気楽に先生に向き合っていればよかった。それゆえ、このノートは断片的なメモにすぎず、自分としては公開が恥ずかしい。カルシュが熱心に話してくれた当時の様子が、記録された語彙（ごい）の累積の彼方に浮かんではくるが、これを正確に再現することは至難の業である。せいぜいカルシュの教壇の周囲に、その日の話のテーマをおぼろげにさぐり求めるくらいが関の山である。宮田は謙遜（けんそん）して、そう語ってくれた。

そんな訳で、ノートのありのままを紹介すると、一九三〇（昭和五）年四月早々の木曜日から開講だったことが分かる。最初は、神話やドイツ古代の農耕社会の話、さらに挨拶の仕方と都市生活の話が、先生の板書の図解とともに進行した。その様子が、それを写し取ったメモからうかがわれる。とにかく、黒板によくチョークで図解しながら説明してくれたのが、宮田には今さらのごとく思い出されるという。

これほど絵や図を使ったカルシュの講義の仕方に関心をもっていた宮田が、松江近郊の風景画をカルシュがひそかに残していたことを筆者の話から初めて知って、少なからず驚いたとのことであった。

ノートによれば、手紙の書式についての丁寧な解説のあと、「ローレライ」に話題が変わっている。これは気分転換で肩の凝りをほぐす授業であった。これだけでなく、次ページに出てくる軍歌、シューベルトの「菩提樹」、さらにゲーテの「野バラ」の歌詞もすべて同様に写し取ったものだ。どの歌の場合にも、一行一節ずつ黒板に向かってチョークを走らせ、柔らかい低音のハミングで確かめるように歌詞を書き進むカルシュの後姿が目に浮かぶという。その後、みんなで節まわしをたどりつつ歌い覚えたのだった。

ところでこの三曲が毎時間続いたが、それがちょっと異常であることに気が付き、思いを巡らしてみると、これには訳があった。そこから、卒業までの残り少ない最後の授業が始まっていたからである。実は、その前年の昭和六年は十一月初めから約一カ月間、同盟休校という授業放棄の異常事態が起こっていたのであった。そのことの顛末（てんまつ）と反省や評価はさしおいて、先生も生徒も疲労困憊（こんぱい）の態で、父母や町の人々にもいろいろと心配をかけたようだ。その騒動がまがりなりにも結末を迎えた十二月の初めに当たる個所に、この三曲が集中的に記録されている。

書き留めた際の、生徒たちを取り巻く状況を考えながらこれらの歌曲を眺めていると、今まで気付かずにいたカルシュの深い思いやりに、今さらながら心打たれる。というのはほかでもない、これら三曲の裏からにじみ出てくるのは、カルシュの無言の教育愛ともいうべき優しさである。

その時は、クラスの誰もが、そんなことにはおそらく無頓着だったであろう。ほぼ一カ月ぶりに教室に戻って来た生徒たちは、自身ではそれに気付かずとも、カルシュの目には一カ月前の生徒とはどこか違って見えたに違いない。顔つきも以前とは違って荒んで見えたのであろう。それを目ざとく感じ取った、教師としての温かい思いやりの心から出た処置であったのだろう。

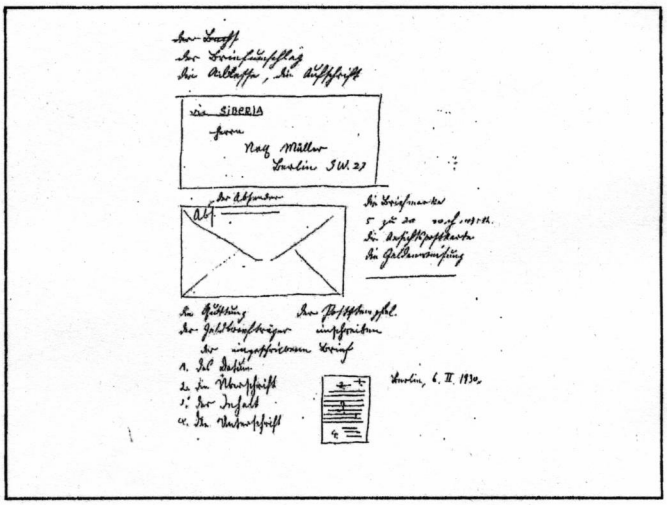
この三曲連続の「歌の時間」を間に置いたおかげで、正月明けからは平常心で大学進学の準備に専念できたのではあるまいか。

「ローレライ」や「菩提樹」は和訳の歌詞で、すでになじみの歌であったが、生のドイツ語で歌う感動はまた新鮮であった。とりわけ生徒を喜ばせたのは、兵隊の歌であった。明治以来の聞きなれ、歌いなれた日本の軍歌の概念には当てはまらない歌で、その刺激は強烈であった。こんな軍歌があったのかと、深く心が揺さぶられる思いがした。戦線での悲惨を、ただサラッと歌い流したところがあるが、それもあとに続く楽隊の囃詞（はやしことば）の繰り返しで消し去ってしまうというアッケラカンぶりであった。

これは恐らく電信兵として第一次大戦に従軍した際に持ち帰った、カルシュの唯一の戦場土産だったのかもしれない。この歌は卒業後も生徒が折にふれては口ずさんで当時を思いやる愛唱歌の一つとなり、今でも時々話題になる懐かしい歌であると、宮田正信、岡崎道夫、白石磷がともに語ってくれた。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝



カルシュが教えた手紙の書き方